

# 自然に感謝し、共に生きる ～アイヌって素晴らしい！～

と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>や<sup>や</sup>ま 遠山 サキ (北海道浦河郡浦河町) × は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>だ わ<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>な 原田 若奈 (神奈川県 聖ヨゼフ学園高等学校2年)

## 1、自己紹介

遠山サキ。生まれは昭和3年6月12日、88歳になります。出身は北海道浦河郡浦河町<sup>あざなわち</sup>字姉茶。子供は6人。上から、長女、次女、三女。そのあと4人目から、長男、次男、三男。私の旦那はね、28年前に蜂に刺されてぼっくり死んでしまったの。だから今は私一人でここ、姉茶で暮らしています。すぐ隣は息子夫婦が住んでいるし、一人で暮らすのはすごく暮らしやすい。

農家の仕事を16歳から始めたの。15歳で隣の安原さんっていう、大農家のところに見習いに1年行って、16歳から自分の家で田畑を耕したんです。親たちは体が弱かったのね、だから、見習いに1年行って来た私が中心になって16歳からやりました。70後半ぐらいまで田んぼをやっていたかな。農家の仕事をやりながら、40代になって、みんな子供たちが羽を生やしてあちこちに行くようになってから、私はアイヌの民芸品に目を向けてやるようになったんです。

## 2、子供の頃の話

私は親が数えの5歳、満4歳ぐらいのときに母親に死なれて、おばさまに育てられてきたの。いつもいつもおばさまに、「サキ、おまえは5つのときから養われてたことを忘れるなよ！」って二言目には言われてた。小さいときは、アイヌだから眉毛もつながるくらい毛深くて、人間であるっっちゃうだけで可愛げがなくて。そういうところが、引け目を感じてなあ、本当に劣等感のかたまりだった。

家において、いじめられて、学校に行ってもいじめられ。アイヌアイヌって犬を呼ぶみたいにな。ここら辺は浜に近いもんだから和人が多くて、アイヌの友達もいなくてなあ。近づいたら、物を

ぶつけられて。それが嫌で嫌で、何とか橋の下まで行って、そこに隠れて、けんけんばって一人で遊んでた。そこが私の学校だった。だからね、勉強はなんも覚えてないわ。学校を出て、こりゃあ駄目だなんていうことで、人の言うことを聞いて、見て、何とか文字とかを覚えて。それだけ、アイヌって、差別されてたのよ。



小学校卒業時の写真(※1)。名人は右から3人目  
悲しいことに、名人の両脇の同級生は少し離れている

## 3、アイヌ文化に目覚めたきっかけ

うちの2番目の娘が阿寒湖のアイヌ部落にもらわれていったわけよ、嫁に。ここらへんでアイヌって言ったら、悪口にしかわれない。だけど嫁に行った娘のところに行くと、アイヌを宣伝して、観光地だった。世の中は広いつて思ってたなあ。私はアイヌのア<sup>ア</sup>の字も嫌だった。けれども、こうして、アイヌを手柄にして、盾にして自分たちは飯を食っていくような、すごい心を持つ素晴らしい人もいた。それで、自分の心も変わったのよ。自信が持てた。

アイヌの文化を勉強しようと思ったとき、教えてくれるのは姉

茶の裏の上の方に住んでいた浦川タレさんしかいなかった。だから、私と私のお友達5、6人でタレばあちゃんを囲んで、アイヌの物事を教えてもらった。最初は刺繍から始めたのね。で、コンクールにマタンブシっていう、はちまきに刺繍を入れたのを、1本だけ出したの。それが入選して！私の手製がこういうふうに実ったのが本当に嬉しくて嬉しくて。そしたらな、アイヌ文化に自分がかまって、一生懸命文化を守っていった方がいいって思いが強くなってね。40代に入って、寝る間も惜しんでアイヌ文化の勉強をし始めたんです。

#### 4、アイヌとしての心

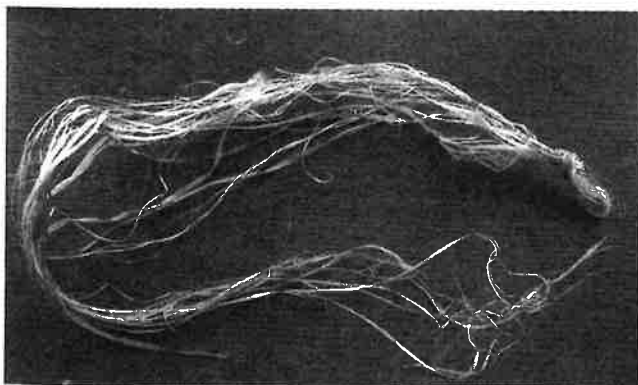
アイヌって一口で言っても、素晴らしいとこ引っぱり出したらたくさんたくさん。言うなれば、アイヌには、昔から文字がない。目で見て、口で話して、耳で聞く。私からあなた、あなたからあなたの子供、お友達。みんなに伝えていく。文字がなくても、みんなに伝わっていくの。これは素晴らしいアイヌの心。

それにアイヌっていう人間は、心に神様がいます。どんなものでも神様。アイヌは神様、とは言わずカムイと呼ぶ。そのカムイが、目に見えないところにも、空にも、空気にもどこにでもいる。私がかこうやって生きているのもカムイのおかげ。だから、毎日寝るときになったら、今日も一日ありがとうっていうのが私の役目なんだ。生きているのは当たり前のこと、って思う人が大半。けどどなあ、私はそうでないんだ。感謝の心を持って、生きている。

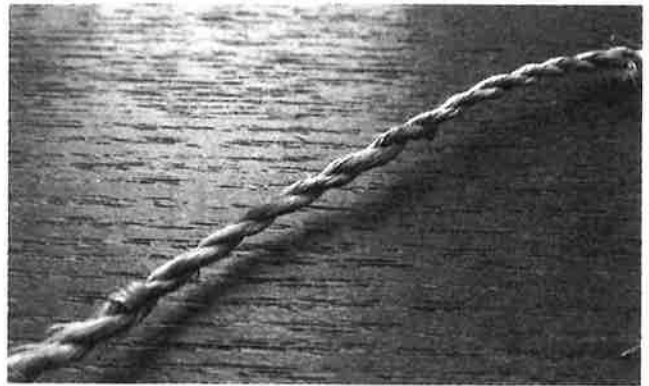
#### 5、カイカが出来ると一人前

アイヌの一番の仕事は糸を撚ること。撚っていくちゅうことをアイヌの言葉でカイカって言ってな、カイカが出来ると一人前。そうやってな、タレばあちゃんに言われて、それでカイカを最初に覚えたわけよ。カイカ一つ覚えたら楽しくて。田んぼの草取りをして、あー疲れたって座っても、そこらへんに生えている草を取って一生懸命カイカをやった。

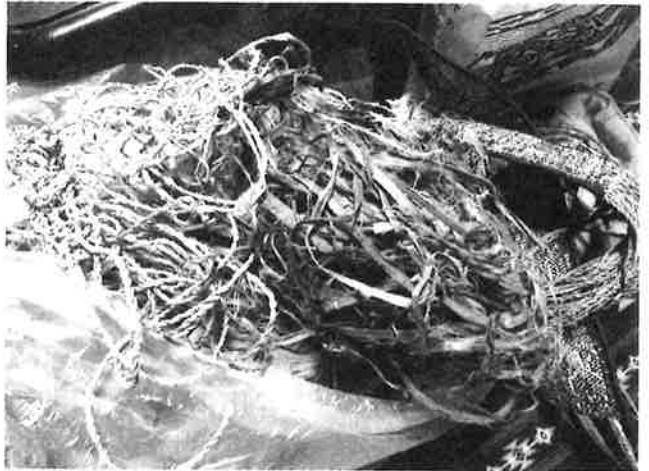
カイカはまず、水で湿らせた木の皮とか草の繊維を何本か束にして、右手と左手でそれを持つ。それで、親指と人差しを使って、力を入れながら親指を前に押し出してねじって糸にしていく。今



このような繊維を何本か使ってカイカをする



名人がカイカした糸。途中、足しました跡がある



左側がカイカをした糸。このように保管されている



カイカをしている名人

度はそのねじった左手の糸を右手の糸の方に持ってきて、ねじる。先端は、一人でやるときは口で先が動かないように押さえておくと、引っ掛けられそうなところに引っ掛けておく。皮とか草の繊維が足りなくなってきたら途中で足します。指の腹にまめができるほどやると、見ないでも歩きながらでも出来るわけな。

#### 6、カイカに使う自然の恵み 木の皮

##### ①シナノキ

シナノキは、山の中に密集している木。ちょっとごわごわしてるし、においもある。これの皮を使うときはまず最初に木を1本

切り倒す。そしたら、横になった木を4つぐらいに分けて、枝を木から切り落としてしまう。シナノキは伸びが早いから、枝を切り落としてもすぐに若芽が出てくるんだ。そして枝の先から皮を剥がしていく。皮の厚さは、いつも感覚でやっているからよく分からないけれども、5mmぐらいかな。ぽっこ（棒）になってるぐらいだから結構厚いよ。剥がすっていうのは、なたを使って枝の先に切り込みを入れて、そうしたらそこをめくって、15cmぐらいのところまで皮をぎゅーっと引っ張るの。



シナノキ（※2）

## ②オヒョウ

オヒョウは家の庭に生えてる木。もう40年ぐらい経っているかなあ。シナノキは枝の先から皮を剥がすけど、オヒョウは枝の根元から剥がす。これがすごく大事なことなの。なたで傷つけて剥がしていくのはシナノキと一緒に。20cmぐらいのところまでめくって、30cmまでいくと皮が年いってしまっているからいい皮にならないんだ。厚さもシナノキと同じ5mmぐらい。

太いから、親木は残しておく。シナノキみたいに1本切り倒さないで、枝だけ切り落とす。そうすると、木から土の上に種が落ちて今に小木が生まれてくる。枝を切り落としてもオヒョウは伸びが早くて、20年ぐらい、30年ぐらいしたら、立派な使い物になるね。



名人の自宅の庭に生えているオヒョウ

## 7、木の皮を剥がすのに適している時期

シナノキとオヒョウの皮を剥がすのに適している時期は、5月、6月。5月になったら木に水が上がって来るから、そうしたら切ってもいい。今は11月でもう秋だから休み。木が眠っているからいじらないほうがいい。で、4月になったら目が覚める。あと5か月だね。7月になったらだんだん乾いて水気が無くなって皮が剥がせなくなってくるんだ。適した時期に剥がすと上手くすると剥がせて本当に楽しい。面白いのよ。水気が無くなって剥がせない時期になると、東京大学演習林っていうところに行っってね、皮を分けてもらった。

## 8、木の皮の扱い方

シナノキとオヒョウの皮を水に浸して、柔らかくなったのをまぜ畳んでおく。それを外にあるドラム缶に畳んだまま入れて1日、2日ぐらいずーっと煮るの。火を消さないようにして。上手くいくと1日で柔らかくなる。生のものと煮えたものは、見たら分かるからな。煮えたものは皮を1枚つまむと皮の間に指が入るぐらい柔らかい。そうして煮えたものを火ばさみであげて、畳んであるまま足で踏む。踏んで柔らかくして、その皮をシートに包んで川に持って行って、川の水で流し洗いをするんだ。それするのにも川のカムイにどうかこれを洗わせてくださいよってお願いするわけ。お神酒を持って行って、拜んで。それから流し洗いをする。

洗い終わったら、干し竿に下げて、雨にあてないように大事に乾かす。乾かしたら、しけらないように紙の袋に包んで置いておく。そうすると、何年たっても使えるんだ。その皮を使うときは、桶に入れて、ぬるま湯に1時間ぐらい浸けて戻して、柔らかくなったのを剥いで使う。ぬるま湯で戻すと、皮がめくれてくるから、1枚2枚3枚4枚って指を入れてぐーっと繊維にそって引っ張って剥いでいくのよ。それが面白くてねえ。

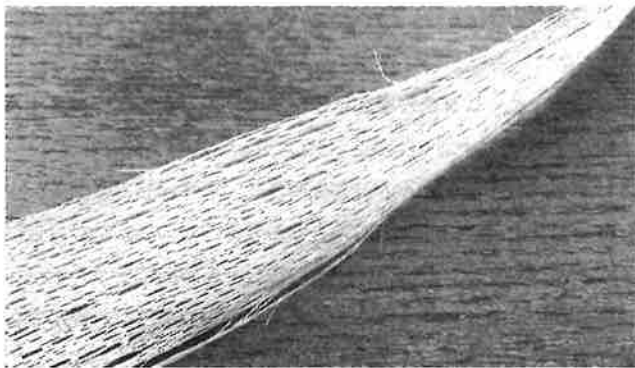
そうしてその剥いで薄くなった皮をもう1回干し竿に下げて干す。乾いたらピンピンピンピンって引っ張って、切れなかったら丈夫だ。ちゃんと耳で聞いて、目で見て。だから、アイヌの仕事っ



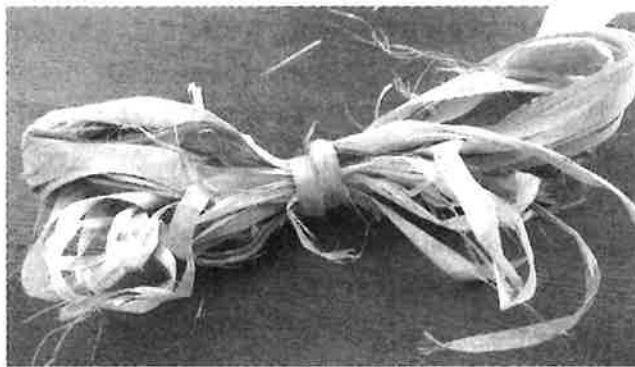
皮を煮るときに使うドラム缶



ドラム缶の奥には煮えたものを干す干し竿があった



シナノキの皮



このように畳んで保管する。結ぶひもも木の皮



オヒョウ。赤く染めて使うこともあるそう

て機械はないの。みんな手や口で。

そのあとは細いものは細いものって区分けする。皮をぐるぐる畳んで、ひもで結ぶ。そのひもも木の皮なんだ。くずも出るけど、そういうものはそれだけまとめておく。だから、何も捨てるとこ

ろはないの。その日はもうそればかりやるわけよな。こうやって乾かした皮は1か月も2か月も大丈夫。濡れてカビが生えたりしたら駄目だからな、そうならないように大事に保管するんです。こうやって保管しておいた皮を、細い糸になるように繊維にそって割いて、カイカに使うわけ。

## 9、糸から工艺品へ

こういうふう乾かしたシナノキとかオヒョウの皮の繊維を使ってカイカした糸から作れるものはもう色々。着物もバックも帯も。着物は弾力性がある強いオヒョウを使って主に作る。シナノキでも着物は作れるけど、切れやすいからね。着物はアイヌの言葉で、アットウシ。木の皮、という意味。これは大事な、大それた着物で正式なときに着るもの。カイカした糸が、自分の背丈ぐらいの長さのもの何本も必要になるけど、それが何本ぐらいかは数えたことがないから分からない。感覚でやってるからな。型に合わせて、昼も夜も寝ないで織っていても1か月はかかる。

刀下げっていうのもアイヌの大事なもの。エムシアッって言って、刀を下げる帯っていう意味。他にもバンダナだって作れるし、作りたいと思ったものはもう何でも作れるのよ。

アットウシとかエムシアッの模様は亀の甲柄って言ってな、この地域の文様って教わったんです。他にも市松柄とか色々あるん



亀の甲柄が刺繍されたアットウシ



作り途中のエムシアッ



青と白の刺繍糸を使ってこれからさらに亀の甲柄を出していく

だけど、それは私も全然詳しくない。この模様は木の皮じゃなくて、買った刺繍糸で編みこんでいくの。難しい、けれども楽しくて楽しくていくらでも作った。

## 10、カイカに使う自然の恵み 草

山の沢のようなじめじめしたところになんぼでも生えている草、これをイラクサって言う。これは丈夫でなあ。イラクサを取る時期は9月、10月。9月ごろにはまだ葉っぱがついているけ



葉っぱを落とした状態のイラクサ



イラクサの繊維

ども、スラーッと1本、私の背丈ぐらいに細く伸びているから、それを刈ってきて、家の庭に広げて立てておくの。4、5日置いておいたら天日に当たって、乾いてくる。それを今度、軍手をはめて、2、3本ずつ葉っぱを落としていく。これも手間のかかることで。葉っぱを落とすと1本のきれいなぼっこ(棒)になる。

皮を剥がすときは、上手に説明は出来ないけど、面白いのよ。乾かしてずーっと置いておいたぼっこ(棒)を木槌で擦るか、シートに包んで足で踏みつけるかすればポリンポリンって草の外側の皮が取れていく。それにパーッとお湯をかけて湿らせてやると中から細い繊維が取れる。その繊維がイラクサの糸。糸を引っ張ったら指が切れるくらい強い。その細い糸を何本も寄せて、カイカをする。

イラクサの糸は色んなのに使える。魚を捕る網を作ったり、山の動物を捕るためのマツポっていうのに使ったり。これで作ったものは車引っ張ってもいいぐらい丈夫なのよ。

## 11、アイヌの今・これから

今、アイヌの文化を伝承している人ってあんまりいない。浦河町だと100人かそこら。アイヌ文化保存会っていう会に入って伝承している方もいるけど、みんなアイヌが嫌いでアイヌをやめて和人に入っている。

アイヌの文化をもっと発展させて、アイヌであるっていうことを恥ずかしがらずに胸を張って話すことがアイヌの心でないか、って思うけども、なかなかみんなそんな考えは持っていない。アイヌだからって卑屈になっていないで、アイヌでも人間だ、みなさんと同じなんだって思って、このアイヌ文化をみなさんに広めて、もう少し、分かってもらいたい。

それから、私が何年もかけて作ってきたアイヌのものを、どこでもいから展示したい。4、5年前に札幌で展示会をやったんだけど、それきりだからな。もう一度だけでいい。私がこうやって一生懸命になってきたことを多くの人に見せたいの。そして知ってもらいたい。

[取材日：2016年9月23日、11月19日]

### 【聞き書きを終えての感想】

夏の研修を終え、取材をする名人のプロフィールが届いてからというもの、私は何度もそれを読み返し取材の日を心待ちにしていました。

取材当日、空港からさらに電車とバスを乗り継いで名人の元へ向かうとき、今まで楽しみだったはずの気持ちが急に緊張へと変わり、どうやって挨拶をしよう、上手く質問が出来るだろうかと不安になったことを今でも覚えています。

取材の中で、私は、感謝の気持ちを持って生きているという名人の言葉が印象的でした。取材の初め、緊張している私に名人は、

遠いところから来てくれてありがとうと言ってくださったり、完成した聞き書き作品を見ていただいたときには、何度も何度も、ありがとうと言ってくださいました。この生き方こそが、アイヌの心なのだと思います。

どんな些細なことにも感謝をする名人の姿を見て、普段当たり前だと思っていること一つ一つに感謝をしていきたい、と私は思うようになりました。まずは、名人との出会いに感謝したいです。

[出典情報]

※1 浦河地方のアイヌ文化とその継承—遠山サキさんの歩んだ道— 中野栄夫著、東京アイヌ協会出版、2007年2月25日発行

※2 シナノキ <http://blog.goo.ne.jp/harada1271/e/9deafea9a0864606a2fd7b4f6bb9eaf4>



 Profile

遠山 サキ・とよま さき

生年月日：昭和3年6月22日 年齢：88歳

職業：アイヌの手仕事の伝承

略歴：5歳で産みの母を亡くし叔母に育てられた。子供の頃は差別にあい、10代の頃は家の仕事や農作業をする日々で、悔しい思いを胸に抑えて過ごしたという。結婚し、子育てが一段落した40歳頃、近くに住む浦川タレさんと出会い、アイヌの手仕事を教わった。それを機にアイヌ文化の奥深さに気付き、以降、様々な手仕事の技術や文化の伝承に尽力している。